



写真-1 庄下橋から新・尼崎城を撮影（平成31年4月）

■ 新・尼崎城、庄下川左岸に完成

写真-1は、ミドリ電化（現・エディオン）の創業者・安保詮（あほあきら）さんが「お世話になった尼崎に恩返しをしたい」という思いから、尼崎城址公園の一角に12億円を超える私財を投入して完成させた新・尼崎城です。

4層4階の大天守に2層櫓の多間櫓小天守が付属する複合式天守という形式の鉄筋コンクリート造です。平成30（2018）年11月30日に尼崎市へ寄贈され、平成31（2019）年3月29日から一般公開されています。

元々の尼崎城は江戸時代初期に築城されたものですが、明治6（1873）年の廃城令※1により取り壊されました。

現在、城跡の一部が尼崎城址公園として整備され、石垣および土塀が模擬復元されています。

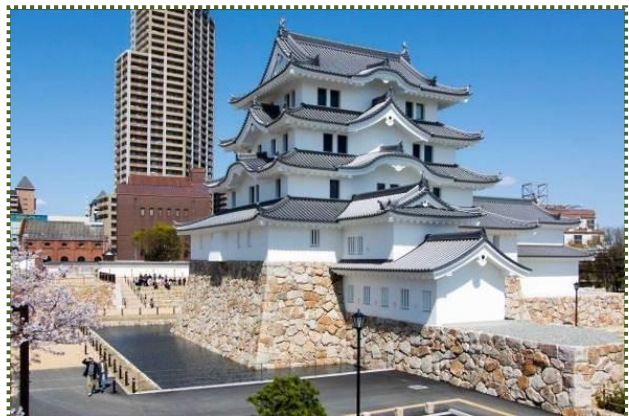


写真-2 新・尼崎城

本丸跡は明城小学校の敷地として利用されていて、その敷地の一角に『尼崎城址』と刻まれた石碑が建てられています（写真-4）。石碑の右側面には「昭和大典※2 記念」、左側面には「明治二十一年 以城砦石材築尼崎港」と刻まれています。つまり、石碑が建立されたのは昭和3（1928）年11月頃で、明治21（1888）年、尼崎城に用いられていた石材を利用して尼崎港を築いたということです。



写真-3 旧尼崎城西南隅にあった
廃城前の伏見櫓（Wikipedia から引用）

※1 廃城令：明治6（1873）年1月14日、明治政府において、陸軍省に発せられた太政官達（だじょうかんたし）「全国ノ城廓陣屋等存廃ヲ定メ置留ノ地所建物木石等陸軍省ニ管轄セシム」の件および大蔵省に発せられた太政官達「全国ノ城廓陣屋等存廃ヲ定メ廃止ノ地所建物木石等大蔵省ニ処分セシム」の件の総称。陸軍が軍用として使用する城郭陣屋と、大蔵省に引渡し売却用財産として処分する城郭陣屋に区分された。これまで全国の城郭の土地建物については陸軍省所管財産であったが、今後陸軍が軍用の財産として残す部分については存城処分、すなわち引き続き陸軍省所管の行政財産とし、それ以外については廃城処分、すなわち大蔵省所管の普通財産に所管換えて大蔵省において処分すべきものとした。この場合の存城処分とは、旧城郭陣屋を「文化財」として保存しようとするものではなく、陸軍の兵営地等として整理すべしとしたものである。



写真-4 「尼崎城址」碑

※2 昭和大典：皇嗣が新たに皇位に就くことを「即位」といい、即位にかかる儀式全般を即位儀礼という。これは皇嗣が即位する「踐祚の儀（せんそぎ）」と、即位したことを内外に宣下する「即位の礼」に分かれる。即位の礼には、剣璽等承継の儀、即位後朝見の儀、即位礼正殿の儀、祝賀御列の儀、饗宴の儀がある。即位の礼後に、五穀豊穰を感謝し、その継続を祈る一代一度の大嘗祭が行われ、即位の礼・大嘗祭と一連の儀式を合わせ御大礼（ごたいれい）または御大典（ごたいてん）と称される。昭和大典は、昭和3（1928）年11月に行われた。

■ 大坂の役後、西の押さえとして尼崎に戸田氏鉄が入封

江戸時代初期の慶長20（1615）年、大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡、幕府は元号を慶長から元和に改元し、長く続いた戦国の世から平和な時代になったことを内外に宣言します（「元和偃武（げんなえんぶ）」）。とはいえ、西国の外様大名の動きは気になるので、元和3（1617）年、西の押さえとして姫路に徳川四天王の一人・本多忠政、明石に忠政の娘婿・小笠原忠真（ただまね）、そして尼崎に戸田氏鉄^{※3}（うじかね）の譜代大名3氏を配置します。そして、元和5（1619）年西の押さえの拠点だった伏見城を破却し、これに代わって大坂とその周辺を西国支配の政治的・軍事的拠点とするため幕府直轄地とします。

氏鉄は、元和3（1617）年7月25日、近江国・膳所（ぜぜ）から5万石で尼崎に入封します。同年10月14日、幕府は戸田氏のもとへ山岡図書頭景以（すしょのかみかげち）をはじめとする5名を新城奉行として差し遣わし、尼崎の地に新城を築くよう命じます。当時尼崎には、大坂の陣で建部政長・池田重利らが守った旧尼崎城がありましたが、「天守これなく櫓ばかり、四方の堀これあり、城五十間四方」（「池田家譜」）程度のものであったので、西の押さえとして、また大坂城の支城として心もとなかったのでしょう。氏鉄は幕府の命を受けて元和4（1618）年の春から築城を開始します。



写真-5 戸田氏鉄の肖像
(Wikipedia から引用・加工)

※3 戸田氏鉄：安土桃山時代から江戸時代前期にかけての武将、大名。徳川氏の家臣・戸田一西（とだかずあき）の長男として三河国（現・愛知県東部）に生まれる。徳川家康の近習として仕え、慶長5（1600）年関ヶ原の戦いに従軍。慶長8（1603）年、父・一西の死により家督を継ぎ、近江膳所藩主となる。大坂の陣では膳所城の守備に徹し、戦後の元和3（1617）年摂津尼崎に入封される。尼崎城を築くとともに治水事業にも力を注いだ。元和6（1620）年から10年にわたって大坂城の修築に築城の巧者ぶりを発揮する。寛永12（1635）年美濃大垣（現・岐阜県大垣市）10万石へ移封される。明暦元（1655）年、80歳で大垣において死去。

■ 庄下川・大物川の水を引き入れ、三重の堀で囲まれた尼崎城を築城

元和4（1618）年に着手した尼崎城築城は、完成までに数年を要したとみられていて、『戸田家譜』によると、尼崎城の築城に際して、将軍自らが2回にわたって尼崎に立ち寄り、氏鉄らに褒美を与えた記録が残されています。

一度目は元和5（1619）年9月に徳川秀忠が「普請の御褒美」として、二度目は元和9（1623）年に徳川家光が「城郭新築を賞して」と記されています。

つまり、普請（土木工事）が終わった時点と作事（建築工事）が終わった時点で将軍が立ち寄り褒美を与えたということから、尼崎城の完成時期は作事が終わった元和9（1623）年頃と推測されています。

尼崎城は、庄下川（しょうげがわ）と大物川（だいもつがわ）が大阪湾に注ぐデルタ地帯に築かれた平城で、庄下川と大物川を城の東西の防御線（外堀）として利用し、両川の水を引き込んだ三重の堀と海に囲まれた水城でもありました。城の縄張りはほぼ正方形で、城郭は連立式の四層天守（高さ約 18m）をはじめ多数の櫓や門で固めた厳重な輪郭式平城で、水に浮かぶ優美な姿から「琴浦城」とも呼ばれていました。

氏鉄が美濃大垣に移封された後に、青山家が遠江国掛川藩（現・静岡県掛川市）から入封し、戸田家の体制を引き継ぎます。図-1 の「寛文十（1670）年頃尼崎城下絵図」は、尼崎藩青山家二代目藩主・青山幸利の頃に描かれた実測図で、縮尺は 1/1,200 だそうです。

この絵図を見ると、戸田氏の時代に城郭内の南端を通っていた街道を城外に迂回させるために築地町や出屋敷が造成されています。また、城内から堀と川を使って船が出入りできるようになっています。西の外堀である庄下川には、北から不明門（あかすのもん）橋、西大手橋、兵庫橋の 3 本が架けられていましたが、今は跡形もありません。なお、現在、不明門橋と西大手橋の間に開明橋が架けられています。

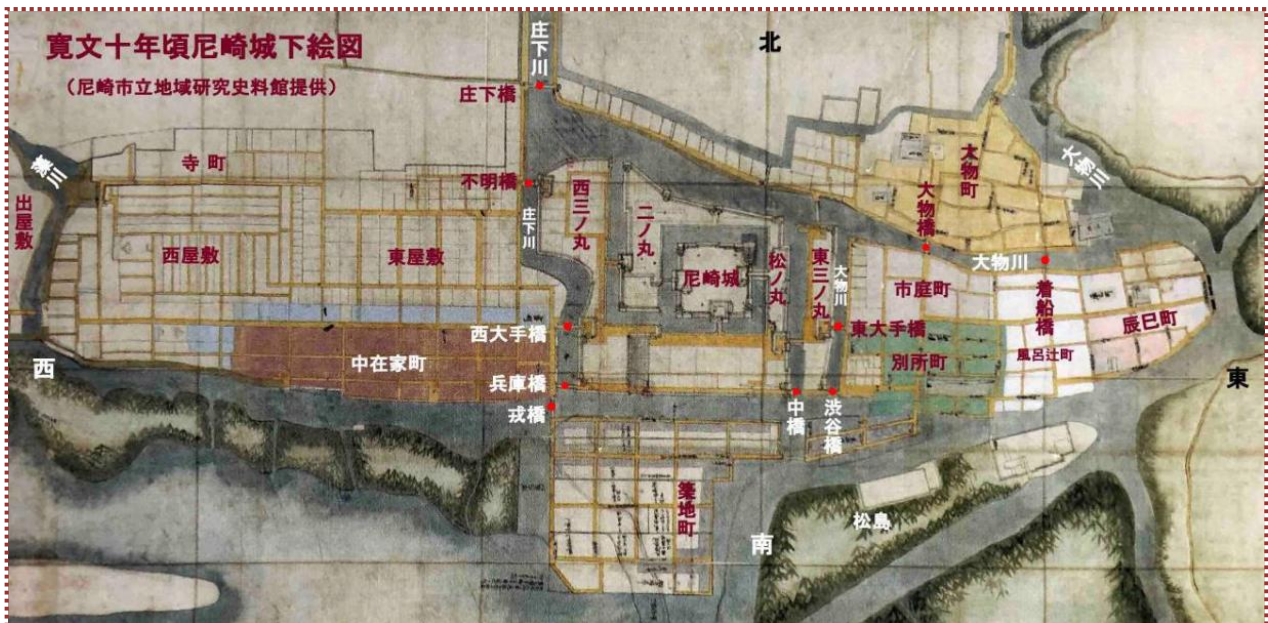


図-1 「寛文 10 年頃尼崎城下絵図」を加工

■ 大正末期、阪神国道建設に伴い庄下川に玉江橋が架かる

明治時代後期以降、産業の発展とともに阪神間の物流が活発になり、それを担うべく明治 7（1874）年に東海道線の大阪－神戸間が開業、明治 38（1905）年には阪神電気鉄道（現・阪神電鉄）が神戸（三宮）－大阪（出入橋）間を開業、そして大正 9（1920）年に阪神急行電鉄（現・阪急電鉄）が十三（じゅうそう）－神戸（後の上筒井）間を開業します。

このように鉄道や海運が阪神間の物流を担っていましたが、大正時代中期になって貨物自動車の普及とともに物資の迅速かつ円滑な輸送を図るため、阪神間の大動脈となる国道を建設する機運が高まってきます。

当時、大阪と神戸を結ぶ旧国道は、尼崎・西宮などの旧市街地では屈曲が多く、幅員も広いところで 3 間（≒5.4m）、狭いところで 2 間（≒3.6m）しかなく、そのため第一次大戦（1914～1918）後の交通需要に対応できる状況にはありませんでした。



写真-6 庄下川橋梁を渡る阪神電車（明治末～大正期に撮影）
（尼崎市立地域研究史料館提供写真を加工）

大正 8 (1919) 年の旧道路法制定を契機に、国庫補助により広幅員（当初幅員=12 間）の阪神国道（現・国道 2 号）が整備されることとなります。大正 9 (1920) 年にルートを選定し、大正 10 (1921) 年 8 月内務大臣認可を得ます。ところが、大正 12 (1923) 年 2 月阪神国道電軌（後の阪神電鉄国道線）の計画がもち上がったのでその軌道敷 3 間（≒5.5m）を加えて 15 間（≒27m）に計画変更されることになります。

大正 12 (1923) 年 12 月に起工し、大正 15 (1926) 年 12 月に完成、同月 25 日に供用開始されました。この阪神国道は昭和 27 (1952) 年 12 月の新道路法に基づく「路線指定」で「一級国道 2 号」に指定されますが、昭和 40 (1965) 年 4 月に級別が撤廃されて一般国道 2 号となっています。

兵庫県内においては、「左門殿川を起点とし西へ梶ヶ島において半径 180 間（≒327m）大物川を渡り、阪鶴線を横過し半径 800 間（≒1,454m）にて右折し庄下川を渡り蓬川（よもぎ）を渡り浜田を経て半径 1,000 間（≒1,818m）にて右折し東大島に至る。同所にて半径 700 間（≒1,273m）を経て左折し西大島、武庫川を渡り鳴尾を経て……（以下略）」というルートです。

この工事の中で、尼崎市域では大物川には稲川橋（大正 15 年 3 月架）が、庄下川には玉江橋（大正 15 年 5 月架）が、蓬川には入江橋（大正 15 年 5 月架）が、武庫川には武庫大橋（大正 15 年 12 月竣工）が架けられました。

大阪－神戸間の整備延長 26.7km のうち兵庫県側の整備延長は 22.2km、これを兵庫県が国の補助を受けてわずか 3 年間で整備したというのは驚きです。



写真-7 庄下川に架かる玉江橋（昭和 4 年頃）
（尼崎市立地域研究史料館提供写真を加工）



写真-8 昭和 9 年頃の阪神国道・玉江橋付近
（尼崎市立地域研究史料館提供写真を加工）



写真-9 庄下川に架かる玉江橋（平成 27 年 10 月撮影）



写真-10 国道 2 号・玉江橋（平成 27 年 10 月撮影）

■ 写真に見る尼崎城・西の外堀（庄下川）の変遷

- **写真-11**：明治 38 (1905) 年に開業した阪神電気鉄道の開業 1 周年に撮影された写真です。右手に写る高い煙突は、阪神電鉄尼崎発電所です。庄下川には、庄下橋と、その上流に阪神電鉄・庄下川橋梁が架かっています。
- **写真-12**：開明橋から上流を望むカットの中央遠景に、庄下橋と鉄橋を渡る阪神電車、右手奥にはレンガ製の阪神電鉄尼崎倉庫（旧発電所）が写っています。右手手前の庄下川左岸には外堀の石垣が写り、川中に向かってせり出した石垣は、不明門橋の橋台部分と思われます。

これらの石垣は、その後撤去され現在は跡形もありますが、不明門橋橋台の石垣の一部は、旧東部第2浄化センター（現・東部雨水ポンプ場）敷地内に保管されているそうです。

・写真-13：この玉江橋は
大正 15（1926）年 5 月に竣工しているの、現在（2026 年時点）100 歳の超高齢橋ですが、まだまだ頑張ってくれそうです。

・写真-14：庄下川はかつてはシジミが採れる清流だったそうですが、昭和 30 年代以降、急速に汚染が進み、ヘドロのたまる川になっていました。

昭和 38（1963）年度から大阪高潮対策事業により改修が進められ、さらに公共下水道の整備と併せ、昭和

42（1967）年度からは河川浄化事業によりヘドロの浚渫や水質浄化が行われ、かなり水環境が改善されています。



図-2 昭和7年の尼崎市街図



写真-11 下流より庄下橋を望む（明治 39 年）
（尼崎市立地域研究史料館提供写真を加工）



写真-12 開明橋より庄下橋を望む（大正〜戦前）
（尼崎市立地域研究史料館提供写真を加工）

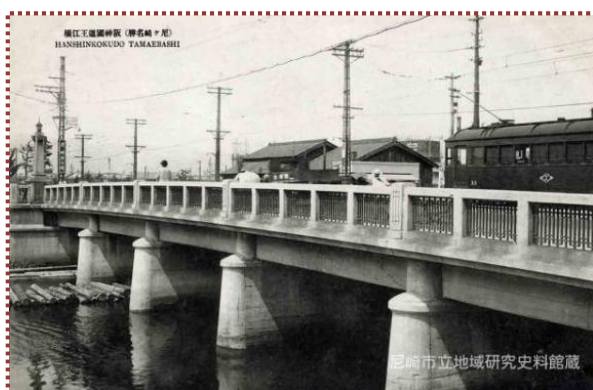


写真-13 阪神国道 玉江橋（尼崎市立地域研究史料館提供）



写真-14 開明橋から尼崎城址公園を望む

■ モノローグ

阪神電鉄尼崎駅のホームに立つと、庄下川沿いに建つ新・尼崎城が目飛び込んできます。元々あった場所での復元ではありませんが、尼崎の新たなシンボルとして、永く市民に愛される城であってほしいですね。

【参考資料】

- 1 『尼崎市史・第二巻』 尼崎市役所 昭和43年3月
- 2 『たどる調べる尼崎の歴史・下巻』 尼崎市立地域研究史料館編 平成28年10月
- 3 『史煙 No.116～近世尼崎城残石探し』 中川雄三・佐藤功 尼崎市立地域研究史料館 平成29年1月
- 4 『尼崎地域史事典』 尼崎市立地域研究史料館 平成8年3月
- 5 『全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方、即位の礼、戸田氏鉄』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

戸田左門氏鉄公顕彰碑

戸田左門氏鉄公は 元和三年(1617)七月二十五日近江国膳所より五万石で尼崎へ転封され 美濃国大垣へ十萬石で転ずるまで十八年間(1617～1635) 尼崎に在任された

公は 幕府の命を受け 海に臨んだ美しい新尼崎城(又の名を琴浦城)を築き 優れた都市計画のもと 寺町を含む城下町を建設された さらに治水事業として 公の名を今に残す左門殿川の掘削 万丈堤防の建設など大きな業績を残された

また公は 卓越した土木技術のみならず稀に見る治世の手腕をもって 近世尼崎の基礎を造られた

ここに 戸田左門氏鉄公尼崎転封四百年を記念し 公の功績を讃え碑を建て顕彰する

平成二十九年(2017)七月二十五日

尼崎文化協会



写真-15 尼崎城址公園内に建てられた戸田左門氏鉄公顕彰碑

※発行：令和元(2019)年10月 『ひょうご水百景』No.101

改訂：令和8(2026)年 6月 『ひょうご水百景』No.101